

メキシコの旅

千葉県八千代市 松尾 昌泰

メキシコのアステカ文明やマヤ文明の世界遺産を観光してきた（2015年3月下旬に）。

成田空港から直行便で12.5時間、午後出発して太陽の動きに逆らって日付変更線を超え、その日の午後には、もうメキシコの観光を開始した。

帰りは、偏西風の影響で飛行時間が長くなる為に、日本への「一飛び」は無理らしく、同じメキシコのモンテレイで給油した。モンテレイでは給油だけなので機外に出ることもできず、停機時間の1.5時間を加え、計17時間も狭い席に居たことになる。飛行機内の通路をウロウロしたり足を動かしたりしたが、帰国した時には両足はパンパンに膨れ上がっていた。



(1) メキシコという国

メキシコについて、思い出すのは「トリオ・ロス・パンチョス」ぐらいで、口ひげをはやしてソングレロとポンチョ姿でギターを抱えてテレビによく出ていた。「キサス・キサス・キサス」や「ベサメ・ムーチョ」などのラテン音楽を歌い、ブームだったと記憶している。

メキシコについて少しだけ調べた。

メキシコの人口は約1億1千万人で日本の人口と大差はないが、面積は日本の約5倍である。スペインの植民地時代が続いたため、カトリック信徒は約90%であり、先住民とスペイン系白人の混血が約60%、先住民が25%、スペイン系が15%とのことである。

資源については世界有数の資源国であり、石油や銀、鉛など豊富に持っている。農業も盛んで、トウモロコシ、サトウキビ、コーヒーなどが生産され、アボカドやライムは日本にも多く輸出されている。

メキシコ最古の文明は紀元前12世紀頃からオルメカ文明で巨大な人頭像のユニークな遺物を残し、

ユカタン半島では3～9世紀にマヤ文明が栄えた。

しかし、1500年代（日本で云うと戦国時代）にはスペイン軍の侵攻により、神殿などがあった湖はスペイン軍によって埋め立てられ、現在のメキシコシティになった。

その後、約300年もの間（だいたい江戸時代に）、スペインの植民地支配を受け、文明破壊や搾取という悲しい歴史の連続であった。1810年、スペインからの独立を目指した戦いが始まり、ついに11年後の1821年にやっと、メキシコは独立を果たしたという。

19世紀半ば（明治維新の20年ほど前に）、西部の開拓に乗り出した米国と領土を巡る戦争に敗れ領土の半分（現在のカリフォルニア州やテキサス州など）を搾取され、現在に至っている。

（2）首都のメキシコシティ

メキシコシティの地形は、四方の5000m級の高い山々に囲まれた盆地で、海拔は2240mもある。この為、インドやサウジアラビアなどと同緯度でありながら、比較的涼しい。

メキシコシティは、かつてはテスココ湖だったが、スペインによって17世紀以降干拓が進められ、湖はほとんど埋められてしまった。だから地盤が弱く、沈下しつつある建物を目撃した。

（2-1）世界指折りの考古学博物館である「国立人類学博物館」

メキシコシティの国立人類学博物館は、古代のテオティワカン、アステカ、ヤマなどの遺跡から、貴重な掘出し物を展示している。マヤ文化の墓石やアステカ文化の暦石など、膨大な数の古代人工遺物を保管している。

この博物館で最も有名な人工遺物は、メキシコシティの中央広場から発掘された「ピエドラ デル ソル」（太陽の石）である。これは1400年代に作られたアステカの暦石で、直径3.6m重さ約24トンの巨大な玄武岩に繊細な図柄が掘っている芸術性の高い円盤状のカレンダーとのこと。



（2-2）メキシコ国立自治大学（壁画）

メキシコ国立自治大学は、1951年にメキシコ王立大学として創設された、ラテンアメリカで最大規模の大学である。キャンパスの広さは700万㎡と言われ、東京ドームの150倍ほどもあり、一つの町ほどの大きさである。もともと広大な荒地に、各学部、研究所、放送局、巨大スーパー、劇場、映画館などが作られていて、キャンパス内を路線バスや学内バスが通っている。



この写真は、中央キャンパスのシンボルとなっているのが中央図書館で、その四つの壁面には、メキシコの神話や歴史を描いた巨大なモザイク壁画があった（世界遺産）。

（3）アステカ古代都市の遺跡テオティワカン（Teotihuacan）

メキシコシティ郊外の高原にそびえる大きな古代都市で、最大15～20万人が住んだと言われている。特に巨大なピラミッドが2つ、太陽のピラミッド（高さ65m、225×225m）と月のピラミッド（高さ46m、150×140m）がある。

次の写真は、月のピラミッドの上より見た、中央の「死者の大通り」と左上の「太陽のピラミッド」である。



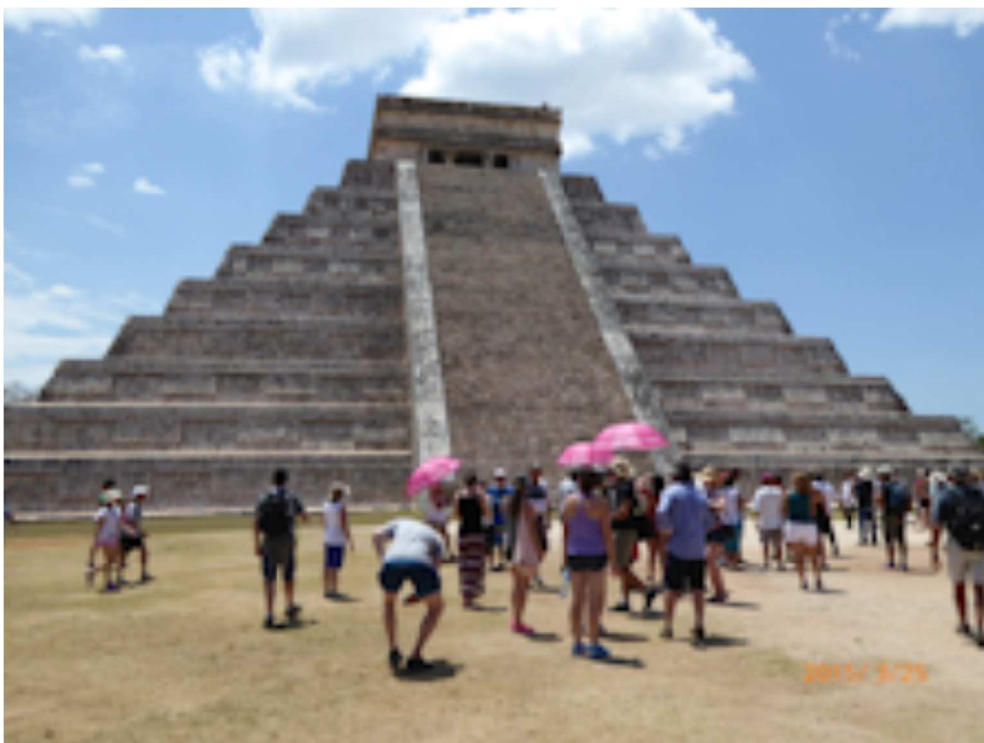
ピラミッドと言えば、エジプトであるが、エジプト最大の「クフ王のピラミッド」は、もっと大きい（高さ137m、大きさ230×230m）。エジプトのピラミッドは人々を寄せつけない造りになっているのに対し、中南米のピラミッドは神殿として使われていて、中央に階段があり参拝者が頂上まで登れるようになっている。

（4）ユカタン半島のマヤ文化の遺跡チチェン・イツァ（Chichen Itza）

ユカタン半島の北はメキシコ湾で、東はカリブ海であり、この半島の北部の密林に古代マヤ文明の都市チチェン・イツァがあり、6世紀ごろ栄え始め約800年も続いている。

（4-1）エル・カステイージョ（ピラミッド）

マヤの最高神を祀るピラミッドといわれ、大きな9段の階層からなり、4面に各91段の急な階段があり、最上段には真四角な神殿がある。



このピラミッドは「巨大カレンダー」ともなっているそうです。

ピラミッドの階段は、4面の91段を合計すると $4 \times 91 = 364$ 段で、最上段の神殿の1段を合わせると丁度1年の365日となる。

また1面の階層9段は中央階段で分断されているので合計 $2 \times 9 = 18$ 段となり、これらはマヤ暦の1年（18ヶ月）を表す。

マヤ人は太陽暦の1年を365.2420日と計算していたそうで、現代天文学がコンピュータで計算した1年は365.2422日。天体望遠鏡もコンピュータもなかったマヤ人がほとんど誤差なく暦を計算していたのは不思議である。このような優秀なマヤ文明はなぜ継承されなかったのだろうか。

（4-2）戦士の神殿

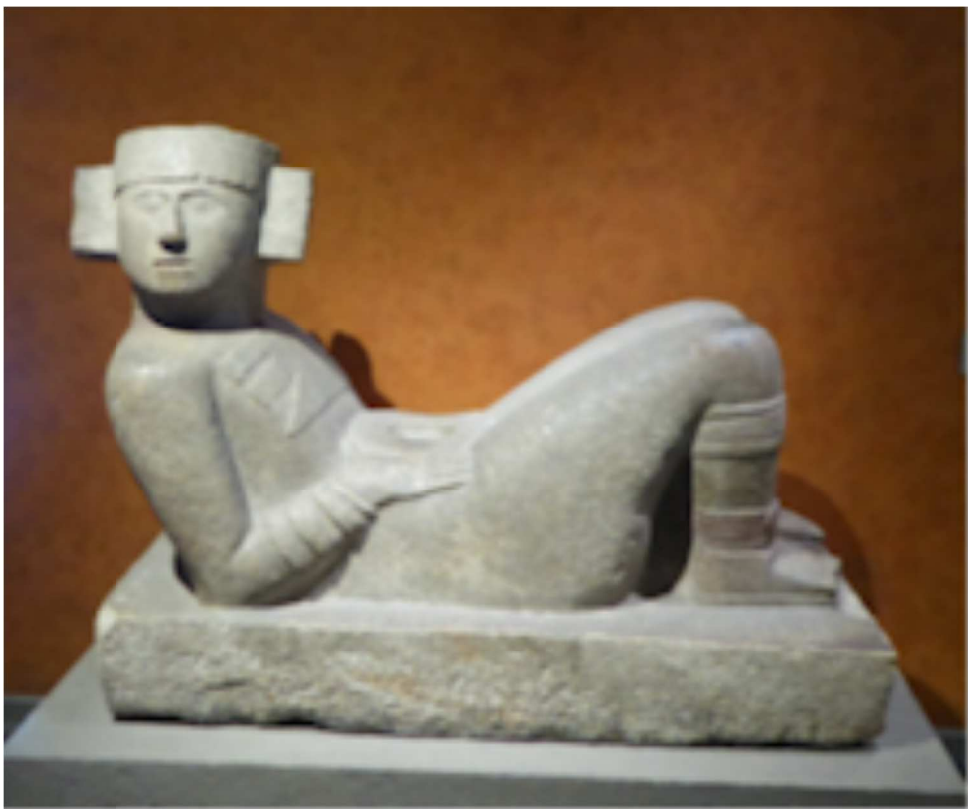
生贄の儀式は、「政治」の中で非常に重要な位置を占めていたようで、「戦士の神殿」では敵の心臓を太陽の神に捧げたという。



上段の中央には、チャック・モール像があり、この像に生け贄の心臓が置かれ、神にささげられたという。

この神殿の上までは登れないのでチャック・モール像は良く分からないが、メキシコシティの人類学博物館に展示されていたチャックモール像で、理解することが出来た。

チャックモール像のお腹の部分は受け皿の様に窪んでおり、ここが生け贄の心臓を置く場所だとのこと。



(人類学博物館に展示のチャックモール像)



(5) メキシコ料理と唐辛子の調味料ソース (=サラサ)

メキシコの伝統料理はユネスコ無形文化遺産になっており、2000年以上のメキシコの伝統の上に、スペインから影響を受けた料理とのことで、その種類も多い。

また、日本の「ごはん (白米)」や西欧のパンの様に、「ティージャ」という、トウモロコシの粉に水を加えて練って焼いたものが毎回出てくる。

ツアーでは、いろんなメキシコ料理が出てきたが、私の口には合わなかった。

しかし、このソースが、毎回食卓に出てくるので、このピリ辛の香辛料で、メキシコ料理の味をごまかすことになった。

これらのソースは、緑色をしたピリ辛の香辛料で、店によって辛さや味が多少異なっていた。

右の写真の小ビン是我家用として購入したもので、「ハバネロ (chile habanero)」というメキシコのユカタン半島の原産の、それも世界で一番辛いと言われている緑色の唐辛子を原料としている。この購入した商品は、現地の料理に出てきたものより一段と辛かった。

以上